

昭和二十四年 国鉄を退職、家業の農業に従事、

兄が戦死のため家業を継ぐ。

(東京都 堀口 卓也)

事実は小説よりも奇なり

熊本県 畠田 完

出生から入隊

大正十四年九月十二日、熊本県下益城郡当尾村(現松橋町)に生を受け、当尾小学校、県立宇土中学校を昭和十八年卒業。受験に失敗、一年浪人の苦しみを味わい、十九年慶大に進み、同年末現役入隊を前に退学する。

父(正記)は朝鮮の郡山で鉄工所を経営、まあまあの業績をあげていたようだが、中小企業のため、昭和初期の不況の波に抗しきれず、倒産の憂き目に遭う。

母(陽)は運悪く結核に罹り、昭和五年二十五歳の若さで他界した。当時五歳で何も覚えていない。運命の

いたずらとして心に深く受け止めている。

幸いにも母の父、いうならば祖父が当尾村で医院を開業しており、私と妹(玲子)は祖父母(高橋貞雄・ツク)の家で育てられた。ちなみに父は数年して母の妹(厚)を娶り再婚、満州新京(現長春)にて国策に則り新天地を求めていた。

昭和十二年、日支事変が始まり、連戦連勝のニュースを新聞、ラジオで聴き、幼い胸のうちをときめかしていた。

祖父は明治三十七、八年の日露戦争に軍医中尉として従軍、満州国旅順、大連の奥に駐屯し、野戦病院で死傷者の手当てに当たっていた。話によると、毎日毎日、死者は勿論のこと、負傷者が担ぎ込まれ、重傷者は応急手当をし後方病院に送られ、軽傷者は傷がよくなるのを待って前線へ送り返されて行く。銃弾、剣による傷が多く、処置が遅れ傷口に蛆がわいている者、盲貫銃創で苦しんでいる者、手、足が砲弾の破片で吹き飛ばされている者、いろんな症状があるが、麻酔をかけるわけでもなく悲鳴の中に埋もれて、息つく暇も

ない忙しさだったようだ。また、凍傷にかかり手足が腐れていく者、疫病に罹る者、戦争の凄まじさ、悲惨さをつぶさに聞いた。

祖父は日曜、祭日もなく、寒暑、晴雨にかかわらず、連絡がくると往診に行き、医は仁術なりを地でやっていたと思っている。治療費は一日三〇〜五〇銭で、現金払いは稀で盆、暮れに精算されていた。砂糖、ソーメン、西瓜、米などを持って、用意した酒、焼酎、肴は座禅豆、干だらの甘煮、白和え、豆腐、油揚げの煮物などを食べ、世間話に花が咲いていた。感謝の気持ちには変わらないが何十銭かの薬価も払えない人が相当たっていた。戦前の農村はのどかで暮らしよい反面、貧しさは想像に絶するものがあった。生かさず殺さずの国の政策だった。

昭和十三年、中学に入った時は、冬は黒の小倉服、夏は霜降りの服、帽子は黒のラシヤに皮のつば、オール皮製の背囊カバン、牛皮の編み上げ靴の新調が義務付けられていた。ところが、昭和十四年の入学生からは、国防色の服、戦闘帽、カバンはブリキで蓋だけが

豚の皮、靴も豚皮に変わっていた。これだけを見てもいかに物資が窮乏していたかが窺われる。ただ、小学校では、我々までが「ハナハトマメマス」の黒一色、一年後輩から色刷りの奇麗な本になり、ちよっぴり羨しいと思ったことが頭をよぎる。

昭和十三年までは、「ネーヤ」と呼んでいた女の人が料理、裁縫、立ち居振る舞いなどの躰をしてくれて二〜三年住み込みで、炊事、洗濯などの加勢をしてもらっていた。月給とかはなく、盆、正月に新しい着物、下駄などを買ってもらい、いくらかの小遣い銭を持って二〜三泊で実家に帰っていた。古き良き時代を思い出す。

昭和十五年は紀元二六〇〇年の国家行事が組まれ、神国日本の有り難さが押しつけられていた。三年の同級生約十人は甲種予科練に志願、終戦までに皆特攻隊で壮烈な戦いの末、十代の若さで散華している。冥福を祈らずにはおられない。結核になり病院生活で助かり現存しているものが一人いる。運命のあやとでも言うのだろうか。

米、麦の主食は勿論、砂糖、タバコ等の必需品も手に入りにくくなり、鍋、釜、金の指輪、時計、キセルなども供出させられ、ついには全ての物が統制され、配給制に突入、不自由な生活が待っていた。そんな中、村内の農家から米をはじめ野菜などは差し入れがあり、祖父母のお陰であまり困らなかつた。

戦局もいよいよ逼迫し、徴兵延期が認められていた学生も昭和十八年には学徒動員され、予備学生として入隊していった。ちょうどそのころ、祖父は病魔に襲われ急逝した。敗戦ということも知らずにかえってよかったのかもしれない。

戦雲急を告げる中、満州に行っていた叔父たちも召集されていた。昭和十九年八月、夏休みを利用して留守家族の引揚げに行くことになった。釜山、京城、安東、新京、ハルビン、牡丹江、東安の行程で親戚の家を訪ね一〜二泊して市内見学をし、近いうちに入隊することを伝え、別れの旅のようでもあった。京城の叔父は新聞記者として情報もある程度持っていたようで、瀬戸際にきている、君たち若い者の奮起にかかつてい

る、頑張ってくれとのことだった。今思うと朝鮮、満州における日本人の暮らし、地位は格別で、表面上は治安も非常によかつたように思う。

牡丹江までは普通に行けたが、東安に行くには警察か軍か忘れたが、国境線のため特別の許可証を取って行った。叔母（高橋キヨ子）の家族五人の荷物をまとめ、叔父（高橋不二人）が入隊している東安のすぐ手前の平陽の部隊に面会に行く。凄く元気でやっていたことが昨日のことのように脳裏をよぎる。新京の叔母（佐分利絹）の家に行き、荷造りをし、二家族十人の世話をし、熊本に帰つたのは九月の初めだった。

当時は、風雲急を告げる南方戦線に派遣され、遅かれ早かれ戦死するものと覚悟し、今のうちに満州へと軽い気持ちだった。残留孤児、婦人の訪日調査のテレビ、新聞を見る度に、絶好の時期に引き揚げたなあと感慨一入である。幼かつた従弟妹たちも、兄さんは命の恩人だと感謝をしている。

ソ連軍侵攻前

昭和二十年二月十五日福岡に集合せよという現役入

隊の通知を受け取り、複雑な気持ちになっていた。十九年の夏一年繰り上げの徴兵検査を受け「甲種合格」と復唱してから覚悟はしていたものの、ついにきたかという感じだ。親戚、知人、友人、近所の人で出立の祝いをしてもらい、父と福岡へと向かう。父は満州を引き揚げ、熊本の航空会社で技術者として働いていた。祖母らからは、病気をしないよう注意し、上官の指示を守り、しっかり頑張り、幹部候補生になり、立派な軍人になるよう懇々と諭されていた。次の瞬間口をついて出た言葉は、「万年一等兵でよか、心配せんてよかばいた」と反発していた。

指定の場所、時間に行ってみると、同年輩のあどけない顔、顔、である。新しい軍服、襦袢、袴下、靴下、戦闘帽などの支給を受け、銃剣も渡され、いよいよ一番嫌いだっただ一つ屋の兵隊になっていた。一番寒い二月というのに地下足袋である。予想したように南方行きだと直感した。乗船命令が下り、夜になって出港、玄海灘を進む。ひと眠りした朝、釜山に着いている。目を疑ったが間違いない釜山だった。

貨車に乗せられ日本海側を北上、二日くらい走ったころ、列車は止まった。車外に出て見ると牡丹江である。通ったコースこそ違うが、民間人としてつい先だつて来た所に立っている。全く言いようのない気持ちである。

また、貨車は動き出した。目的地がわからない。一日くらい走って止まり、今度は下車命令だ。東安である。「この道はいつか来た道」という歌を思い出していた。六カ月前と違うものは、辺り一面真っ白な雪化粧の大平原が広がっていることと、軍人として立っていることだ。貨車の中で防寒靴に履きかえたものの足の感覚がない。兵隊を受領に来た下士官に、足を上下に動かせ、止まったら凍傷になるぞと注意を受け、トラックに乗せられ、廟嶺の歩兵九二七部隊に到着、暖房のきいた部屋に入り人間らしさを取り戻していた。

初年兵の到着を祝い、夕食もご馳走が並んでいる。腹の虫を抑えながら料理を見てみると、肉、魚を中心に酒、ゼンザイなどの豪華版である。ところが期待しているゼンザイの中にカボチャが入っているのがわか

り気がかりである。内地にいたときは、べちゃっとした舌触りのカボチャが大嫌いで、農家からもらったカボチャを藪の中に捨てて帰り、後でそのことが分かりきつく叱られたことを思い出していた。

中隊長から、関東軍の虎の子だ、早く軍隊生活に慣れ、国境警備の重任に耐えるよう訓示が終わり、食事が始まった。米の飯、おかずを平らげ残るはゼンザイだ。まだ満腹はしていない。観念してゼンザイに立ち向う。意外や意外、栗を食べるような風味、甘さ、うまさに驚き一気に食べ終えた。在満の同年兵に聞いてみると、栗カボチャといって内地のものとは品質、味が全然違うとのことであつた。とにかく、うまかつた。国を出てから初めて満腹感に浸つた。

起床ラッパに起こされ、床上げ、掃除、点呼、飯上げと目まぐるしい毎日が始まった。雪の上に整列し、その日の重点事項等を聞き、訓練開始だ。防寒用具は完全装備しているものの、手足は縮こまり動きは鈍い。白い息を吐きながらの演習が続く。学生時代の教練の時間も配属将校からいやというほどしばらくは、さ

すがは本職、全く比較にならない厳しさである。満州の寒さは聞いてはいたが、形容しがたい寒さだ。眉毛、睫毛、鼻毛も真っ白く凍りついている。防寒帽の中から目だけがぎらぎらと光っている、異様な光景だ。

三月末に牡丹江省平陽の八〇三部隊に丸ごと移動した。東安の叔父が召集され、面会に行った所だ。もしかすると叔父と再会できるかもしれないと淡い期待をかけて平陽へ。着いてびっくり、兵舎はがら空きである。班長（沖繩の大城伍長）に尋ねると、平陽の部隊は内地防衛のため移動したとのこと、夢ははかなく消え去つた。反面、叔父にとってはよかつたと思つた。

しばらくして所属する大隊は国境線の陳地警備の任が下り、各中隊ごとに陳地配備についた。我が六中隊は六二号陣地小鹿台と決定、平陽鎮の小さな街を通り、国境へと歩き続ける。山の据野に兵舎がポツンと見える。本隊が入っている赤煉瓦とは大違いの古ぼけた木造が二、三軒建っている。完全軍装の重みと人里離れた寂しい国境の緊張感が肩に重くのしかかつてきた。人の影は見当らない。丘の上を鹿のようなものが動く。

素早い動きをするが名前は「ノロ」といい、肉がうまいと教わった。草木が芽をふくころは青臭く、食べべごろは今だという。

国境にきて演習は更に激しくなり、凍傷にやられた者もいた。朝夕の点呼時は気合が足りないと言われ、往復ビンタが飛んでくる。機嫌が悪いと上靴、帯革での制裁もあった。歯をくいしばって辛抱する以外になかった。

国をでる時は、万年一等兵と反発したが、現実、屋一つ、いや一日でも早く軍隊に入った者の権力は絶大であった。幹部候補生の試験が平陽の本隊であった。考えた末心ならずも平陽へ行った。別れ別れになった同僚とも再会、お互い元気を確かめあった。

五月も中旬になると満州にも春が訪れ、演習場も花がほころび始め、一斉に咲き誇る様は見事な風景だ。苦しい訓練も花の中に埋もれ楽しささえ覚える。生活に慣れたせいもあり、軍隊生活が板についたようになさわやかさだ。花の間から雉が飛び立っている。三々五々メートル滑走して飛び立つので、その辺を捜すと巣があり、休憩時に卵にありついて精をつけたことを思い

出す。自然破壊の第一号かもしれない。

匍匐前進、射撃、実弾射撃、銃剣術等の訓練と併せて対戦車地雷の実習が多くなった。更に陣地構築作業も日課になっていた。国境線の厳しさが伝わってくる。

歩哨とか山の上の分哨勤務も任務の中に入り、兵隊生活も本番を迎える。分哨に就くとソ連との国境が手に取るように見える。不気味なまでに静かな所に女の兵隊が割合に多い。攻めるなら今だぞと冗談まじりに会話をしていた。五月末から六月に入り、男の兵隊が補強された。何故かだれにもわからない。帰国してから、その時ドイツが敗れ対日参戦のためだったと合点がいった。

七月十日幹候の一次にパスし、近いうちにどこかの予備士官学校に行くのを待っていた。どちらかという和平穏な日々が過ぎていた。

ソ連軍侵攻

八月八日は大詔奉戴日で早朝に非常召集がかかった。完全軍装で陣地に配備し、敵味方に分かれ、実戦さながらの訓練をし、終わって宮庭で銃剣術の試合があり、

古年兵に勝ち、気持ちよく眠っていた。白川夜舟の日付が変わったころ、再び非常呼集がかかり、今終わったばかりなのに間違いいではないかと目をこすりこすり集合を終えると、中隊長（榎井中將）以下顔色が変わっていた。

隊長から、ソ連侵攻、開戦の知らせ。厳肅と緊張の一瞬。今朝の態勢で陣地につく。その下の平陽へ通じる道は既にソ軍の部隊が侵入通過中である。陣地を相手にせず通り抜ける敵もあれば一戦を挑む敵もいる。斬込隊を編制、激戦が繰り返された。しかし決定的な決着がつかないまま十二日の夕方となってしまった。隊長命により全員合流することになる。真っ黒く汚れた顔と顔、お互い元気な姿を喜び合ったが、戦死した友も相当いることがわかり、冥福を祈るとともに、明日は我が身と何とも言えぬ寂しい気持ちだ。

小雨そば降る中、隊長と見習士官（河本）の隊に分かれ、進む道も別々に連隊本部平陽へ向かう。途中トウモロコシ畑で小休止をしていると、前方に人の気配、続いて闇をつんざく銃声。しばらくして撃ち方止めの

号令。おかしい。実は友軍の同士打ちであった。死傷者を出した不始末は何ともいいようのない空しさだ。危険分散のため二手に分かれて行動したのが裏目に出ってしまった。

平陽は占領され、連隊が陣地構築中の八面通へと進路を変えた。山また山を歩き続け、疲れと空腹、それに雨で、小休止には行き当たりばったりに眠ってしまった兵隊、気力つきて倒れ込む馬、哀れである。山中独り寝てしまうことは死につながり、戦友同士励まし合って、落伍者を出さぬよう懸命の努力を払った。

八月十七日未明、梨樹鎮の町がかすかに見える。八面通からソ連軍がやって来るとの斥候の報告。中隊長は「全員の命を俺に預けてくれ。発砲は一切しない。肉迫攻撃で敵を倒す」と力強い命令があった。武者ぶりを示す。陣地からここまで、死に場所を求め続けてきたのだ。悔いのない戦いを心に誓い、国道の斜面に伏せた。この時ほど厳肅で神聖な場所はなかった。人が死を決したときの異様な雰囲気である。緊張と静寂が続く。ソ連兵の靴音と話し声が聞こえ、我々の前

を通り過ぎて行く。突っ込めの号令はまだかと思を殺して死人のように伏せている。ロシア語でガヤガヤ喋りながら、笑い声も聞こえてくる。察するに、日本兵は既に死んでいると言っているようだ。

次の瞬間、朝のしじまを破って銃声一発、友軍の最先端から放たれた。笑い声は怒号と変わり、阿修羅の戦場と化した。狙いを定め乗馬している幹部らしい奴を狙撃、目の前にバタツと倒れるのが見え、敵の慌てぶりはひどかった。それも束の間、態勢を整えた敵は、腰にかまえた銃から、まるで機関銃のようにダダダと撃ってくる。初めて見る自動小銃の出現である。隣の戦友に命中、「ブーッ」と言う声を残して死んだ。

両軍旨打ちの戦鬨となった。長いようで短いような時がたち、後方の山麓に集まれるの聲に、死んでいった戦友を残し、沼地を走り抜ける。集まった者は十人単位で牡丹江目指して行動を起こした。隊長、見習士官も事切れたらしく顔を見ることができない。それにしても通称マンドリン銃の威力は絶大なもので、大和魂も武器の差には抗し切れなかった。

班長（織田伍長）以下十人で黙々と山道を歩き始め、八月二十日朝、山腹から銃撃を受ける。静かな山道での出来事だった。大丈夫という油断から、十人の縦隊は十メートルくらいの距離から一人一人狙いをつけられ満軍の狙撃を受け、草むらを匍匐して逃げる。右肩に何か当たったなと思って前進していると、持っている銃が重くなり、肩をみると真っ赤な血である。渾身の力を振りしぼって草むらを這い、溝の中に入り、左手で止血をし、眠ったらおしまいだと睡魔との戦いである。同志は散り散りばらばらになったが、ただ一人班長がそこにいた。彼も右親指から鮮血が流れている。止血を頼まれ、しびれた手で一生懸命三角布を巻いてやった。自分も右肩の止血を頼んだが、手がかなわないからできないと断わり一人で山へ入って行くではないか。関特演の生き残りだと威張っていた班長だが、怒りを通りこし兵隊の哀れさを一人かみしめていた。帰国して調べたら班長は帰っておらず、人の運命の機敏の微妙さを痛感している。

夕方になり、朝通った道を大部隊が通っている。敵

か味方かはっきりしない。このままでは死しかないと考え、大声で助けを求めた。走り寄ってきたのは友軍で、次の部落まで同行してくれた。衛生兵がリバーノールガーゼを当て応急手当をしてくれた。と同時に貫通銃創であることも分かった。盲貫でなくてよかったと励まされ、いくらか安心した。

親身になって介抱してくれた満人一家にお礼を言い、家を出たのは三日目だった。満州特有の入口の山門の方を見ると十人くらいの一団がやってきた。叔父に似た顔がある。しかし眼鏡をかけていない。叔父は内地のほずだと自分の目を疑いつつ走りよってみると、まざれもなく叔父である。この広い満州で、この混乱の中で巡り会うなんてだれが想像できただろう。現実には奇遇が起こっている。一年前平陽の部隊で面会して以来の再会に飛び上って喜び合った。つもる話をしながら同行することになり、千人力を得、負傷した心の傷も治ったような晴ればれとした気分だった。

来る日も来る日も歩き続け、最終目標だった牡丹江へ。最強を誇った関東軍の一大拠点牡丹江も敵の手中

にあった。やむなく山中をさまよいハルビンの方へ向かっていった。ハルビンも駄目という情報が入り、協議の結果、吉林に出ようと計画が立てられた。現在地を確認のため、叔父と大阪の兵長（川島）と三人で行くことに決定。暗くなるのを待って鉄道の脇にある信号所名を確かめにいく。ソ連兵十人くらいが警備をしている。反対側クーリー小屋に忍び込んでチャンスを探った。

がらくたがいっぱいあり、中央に箱が積んであった。箱の陰に身をひそめた。歩哨が小屋の周りを巡察し始める。息をこらしていると、五回目くらいに中へ入ってきた。何か灯をともしながらだんだん近づいて来る。箱の中を覗き込み三人を発見。指を口に独特の合図で、全員に取り巻かれ集中砲火をあびる。もうこれまでと三人立ち上がり両手を挙げ「降参」と叫ぶが敵には通じない。空箱が飛ぶような猛攻は止まない。叔父は二人にしゃがむよう命じ一人立っていた。次の瞬間胸に命中、ギューという悲鳴と共に倒れ込む。手で頭を起こし、叔父さんと連呼するも応答なし。強い血しぶき

で叔父は勿論、我々も血まみれだ。血はだくだくと吹き出し、手の上の頭がガクッとおちる。叔父との思い出、特にこの二十日間のことか頭をかけ巡る。負けん気で、責任感の強い反面、人の良い、人の世話を良くする叔父、一緒だったればこそ今口までこれたと思うとこみ上げるものがあり、涙が止まらない。

ふと我に帰ってみると、兵長も困った顔で見つめている。塀を乗り越えて脱出しようと即決した。叔父も犬死にはするなと言っているようだ。寸刻を争う事態である。敵も撃ち止めている。二人一緒に飛び出したが、成功したのは兵長だけである。暗闇の中の物音にまた銃声がとどろく。右手を吊っていたため、グッシュンがきかない。叔父と共に取り残された。叔父はうめき声もなく息絶えているようだ。沈静が続く。心の中で叔父との別れを告げ後る髪を引かれる思いで闇の中に飛び出す。銃弾が後から追っかけてくる。湿地帯に足を取られ転びながら、山裾めがけて走る。叔父の加護が無事だった。

容赦なく降る雨の中、一晩じゅう歩いて頂上へ辿り

着く。悪夢の九月十一日の夜が明け、九月十二日、二十歳の誕生日を迎えていた。好事魔多しのたとえの通り、苦しい中にも楽しかった叔父との逃避行も最悪の状態で幕がおり、一人放り出されてしまった。

忘れようと思えば思うほど、小さいころからたつた今まで、お世話になった叔父のことが頭の中に甦ってくる。山上から叔父の最期の地に向かい合掌して冥福を祈り、悲しみをこらえ山中をさまよう。西の方角に下りて行くと煙が上っている。近づくとクーリー小屋が見え、人のいる気配だ。昨夜まで一緒だった兵長が「マントー(饅頭)」を焼いていた。腹一杯食べ、携行食も雑のうに入れるだけいっぱい作り、準備完了。予定どおり吉林を目指し、太陽、月あかり、磁石を頼りに西南の方向に進路をとった。

山を下りた所は白系露人の村ヤプロニーの近くだった。身なりも小ぎれいな老婦人が笑みをたたえて日本語で話しかけてきた。「兵隊さん、御飯は食べているか」「全然食べていない」と答えると、「ほんとうに可哀相だ。うちにいらっしやい。御飯、パン、蜂蜜、肉、

など食べ物は何でもある。兵隊さんも沢山集まっている。もう少し集まったら、どこかへ行くと言っている。ついてきなさい」と、たどたどしいが誠実さが感じられる説得だった。疑えばきりはなし、結局婦人について行った。

終戦

村の入口に差しかかると、物陰から満軍、ソ連兵数人がつかつかと寄ってきて取り囲んだ。恐れていた武装解除だ。金、時計、万年筆などを略奪され無一文になった。しまった、だまされた、という悔しさと、当時は敗戦、捕虜なんて考えられない時代で、ショックも大きかった。九月十五日の午後だった。

終戦詔書が出されてちょうど一カ月、無益な長い空間だった。山合いの満人、朝鮮人部落をぬうようにして行軍。目立たないように、同時に食糧の確保で、米、粟、塩、みそ、豚肉などを力で徴発して行く。通過する者皆が無理難題を言う。住民はたまったものではない。そんなとき、日本は全面降伏、戦争は終わったと幾つかの部落で聞いた。デマだ、嫌がらせとだれも信

用しない。何を言うかと罵倒し、時には殴ったり蹴ったり暴力沙汰。まだ武装をしているので、住民もこれ以上のことは言わない。戦争の哀れさ、戦場となった所の悲惨さ、言語に絶するものがある。

あのときもう少し素直に聞いていれば、叔父をはじめ多くの人々も救えたのにと残念でならない。人の言うことに耳を傾ける度量の大切さを教わったと思っ

ている。

命の恩人ともいうべき老婦人と五日間で別れ、拉古の旧軍の広場に移された。線路を歩く途中、叔父が亡くなったった地点に差しかかる。当時と同じように警備兵がいる。立ち止まろうとするが、「ダワイ、ダワイ」追いたてる。信号所の名前は「松山信号所」と記憶している。遺骨を必ずお迎えに来ますと黙礼をして通り過ぎる。

顔、手足は日焼けと垢で真っ黒、夏服はポロポロ、靴は糸が切れて形をなさず、麻袋を後生大事に肩にかついできた。中身は自分で作った木の箸、拾ってきたフォーク、スプーン、それにめし炊きと食器兼用の缶

詰缶二、三個が全財産だ。麻袋は夜になると寝袋に變身する貴重品である。乞食同然、それ以上の姿だ。

拉古から海林收容所へ移動、ここには各方面からいろんな人が收容されていた。髪を短く切った開拓団の女の人、まだ十五歳くらいの義勇隊の少年もいた。そうかと思うと部隊全体が完全軍装の上に、夏、冬、防寒関係の服、靴、帽子、襦袢、毛布まで持てるだけのものを持ってきていた。ハルビンにいて戦争をしていない部隊だった。何か一つでもいいからわけてくれと頼むが、快い返事はない。寒さにふるえていても知らぬふりをしている。全くやるせない気持ちだった。人は極限を迎えたとき自分のことしか考えない動物だとわかった。

十月になるとさすがに寒さがひどく、牡丹江の旧兵舎に移され、表面上は昔の生活にかえった。被服もつぎはぎした中古品と、綿入りの満人服の新品が支給され、いくらか人間らしい姿になった。收容所内は、軍隊の延長で、各地から来た部隊の寄合い所帯ができた。同行して来た気の良い兵長も他の部隊に配属され、永

久の別れとなり、知っている者はいなくなった。

週に二回牡丹江の街に物資調達といって使役があった。目的は暖房と風呂の燃料として電柱、家屋の柱、板、石炭の確保であった。一つ楽しみは、住宅街に行くとき、下着、タオル、靴下、足袋など古着を見つけたときだった。

シベリア抑留地への旅

牡丹江生活は寒い冬の間六カ月、この間健康な者は千人単位で大隊を組み帰国するといつて勇んで出て行った。病弱者、負傷者もよくなり次第に別れて行く。残る者は心細い限りだ。

ついに来た。三月末、千人編成で、胸をわくわくさせ待望のダモイ（帰国）列車に乗り込んだ。ギューギュー詰めの貨車は、道草を食いながらゆっくりと東の方へ進む。中隊長以下多くの戦友が眠るであろう梨樹鎮、叔父ももう一ぺん元気で来たかったであろうゆかりの地東安も過ぎて行く。ウラジオストックに向かつて走っているものと勝手な想像をし、幻想の世界に浸っていた。

四月中旬やっと着いた所は、周囲が山ばかりで様子がおかしい。命令に従い貨車から降りると、凍て付いた、冷たいソ連領シベリアのチグロワヤだった。五六五作業大隊の仕事は、この駅での貨車積みと、山奥に入り伐採をするものとに分けられた。谷を越え川を渡る水陸両用のトラックに分乗し、山奥に落ち着いた。優秀なトラックがあるもんだと感心していたら、何のことはない、USAアメリカ製の車だったのには、二度びっくりだった。その素晴らしさ、山だろうと、川だろうと、大ていの障害物は屁とも思わないし、荷物もよく積む頑丈なものだった。

抑留地の生活

直径十五センチくらいの丸太を積み重ね、内と外から壁土を打ちつけ、ところどころに明かり取りの窓があり、屋根は木を小さく割ったものを張ってあり、薄暗い建物が宿舎だった。

中は小さい丸太の棚が二段あり、雑魚寝をするようになっており、四隅と中央には大きなドラム缶がペチカの代わりとして据えてある。勿論電気はなく、ラン

プが用意しており、殺風景な山小屋である。

捕らわれの身になって、いつもつきまとわれたのが「シラミ」である。着たきり雀の上、入浴も一カ月に一〜一・五回、誠に不潔そのものだ。入浴中に衣類の煮沸消毒、殺虫をするが、成虫は死んでも、縫い目にびっしりといっている卵は健在である。シャツを脱いでは、爪でビシッビシッとシラミつぶしが日課である。寝床の板の間には南京虫という厄分なやつも住み込んでいる。ただでさえ生きているのがやつとというのに、貴重な血を四六時中吸い取られる毎日だ。

労 役

帰国するつもりが一転して千仞の谷に突き落とされたような生活が始まった。起床、点呼、食事をすませ山行きだ。カンボーイ（警備兵）つきで作業場に急ぐ。二人引きの鋸で木を切り倒す。斧（タポール）で枝を払い、二メートルの長さに切り、一メートルの高さに積み、ナチャリニック（監督）の検査を受ける。時にはカンボーイを我々の中隊長が代行することもあった。朝八時から夕方六時ころまでよく頑張った。

仕事にも大分慣れたころ、よく働く者から早く帰すという出所不明の言葉にだまされ、ノルマカンチャイ（仕事終わり）も早くなった。仕事が捗れば捗るほどノルマを上げてくる。五立方メートルから七、一〇、一二立方メートルへと上げ、最終的には一五立方メートルになっていった。よく働くエコノミックアニマル的な性質をうまく利用され、敵の術中にはまっていた。零下三〇度を越す極寒の中で、自分の首を締める結果になり、死期を早めた友もかなりいたのではないかと悔まれてならない。

病弱者には「コバ割り」の仕事があった。縦の木を五〇センチに切り、それを斧で薄く割り、屋根の材料を作るのである。ノルマはあったが軽作業で、行く人は大体レギュラーメンバーだった。特に体調が悪いときは回してもらえぬ緩衝地帯でもあった。このほか道路工事という軽作業もあった。

初めのうち、ノルマを達成すると、ハラシヨラポーター（優秀労働者）として何ルーブルかの褒賞金をくれた。煙草、パンなどを買い、豪勢な思いをしたこと

もあった。また、ラーゲルで五人選ばれ、ハバロフスクに糧秣受領の旅行をした。勿論ソ連人と一緒に客車の旅だ。談笑しながら、マホルカ（新聞紙で巻いて吸う荒く刻んだ煙草）、パンを食べると、すすめてくれるし、ヤポンスキー（日本人）、日本に帰りたいだろうと、日本の音楽をギターで弾いてくれたり、人情の機微に触れたこともある。政治体制は違っても、個人は豊かな人間性を持っている。世界平等だと痛感した。秋には一〜二回近くのコルホーズにジャガ芋掘りに全員で参加した。食べ放題とまではいかぬが空腹をいやした。トマト、キュウリなどの収穫もあり、ごまかして持ち帰りおやつに食べた。夏が短いので総て収穫分が小さく、中には真っ青のままというケースもあった。

伐採中、赤松を見つけたら、松の実を取るのが楽しみだった。焚き火の中で蒸し焼きすると、ピーナツを小さくしたような餡色の実が出てくる。最高の栄養源、嗜好品だった。大きな木に登って取る方法と、切り倒す方法があるが、一本の木に麻袋何ばいも取れ、カン

ボーイたちに一袋でもやろうものなら、大喜びで、ノルマも大目に見てくれた。

抑留者の統制管理

頭、腹、肩、腰が痛い、風邪を引いたと診察を受けても、ソ連の軍医か衛生兵が、腹、尻の皮を引っぺり脂肪の量で判断する。薬もなく、休むなんてもっての外である。日本の軍医もいるが口をはさむことはできない。三十八度以上の高熱者は内務班で休ませ、二三日様子を見て病院に入院した例も何件かあったが、その後の消息は不明。

人間離れた生活の中で、元気だった人が起きてこない。冷たく息絶えている。栄養失調の恐ろしさを何度となく味わされた。特に家族持ちの召集兵が犠牲者で、何とも言えない気持ちだった。ある時は伐採中にダニに食われ、ダニ脳炎で、また伐採中の事故で一命を落とす戦友、常識では考えられないことが日常茶飯事のように起きる。出来る事と言えば、ラーゲル(収容所)の裏山に穴を掘り、硬直した屍を真っ裸にして葬るくらいで、その穴も凍りついて満足に掘れない。

今でも目に浮かび、慚愧の極みである。

ある日、夕方になると目が見えなくなる夜盲症の友、カルシウム、ビタミン等の栄養がいかに大切か、飽食時代の今では考えられない状態が現実だった。

朝にちょっとラジオ体操をするくらいで、健康管理というようなものはなく、いつか帰れるだろうと自分に言い聞かせつつ、ただ気力との闘いで生き延びていた。

カンボーイが見守る中で朝夕の点呼が行われ、余程のことがない限り屋外であった。作業場、道路での監視は、「ダワイ、ダワイ、ヴィストラ」(早く歩け)と入ソ当時は口うるさかったが、お互いに慣れ、気心もわかってくるにつれ、いくらか緩和されてきた。

被服は夏、冬と各自に支給されており、自分で丹念に補修をして着ていた。防寒具なども最低のもので、凍傷にかかった者も相当いた。

食事は原則として三回、朝夕は穀類がどこに入っているかわからない汁本位の雑炊で、鮭、鯿、肉、きゅうり、トマトの酸っぱいロシア漬、ジャガイモの煮っ

ころがしなどが副食としてついていた。昼は黒パン三百グラムの配給があり、その配分は皆注視の中で、自分たちで特製した秤にかけ、一グラムも違わないよう出たくずまで分けていた。その上、抽選である。黒パンの角のかたい所が齒ごたえがあり、うまいので、希望者が多いからである。とにかくいつも腹ペコである。手に渡った途端食べてしまふ人、夜寝ながら少しずつ、味をかみしめている者、ほとんど夜の内に処分されてしまっていた。明日の昼食は？と考える余裕はなかったのである。

夏は野草を、馬、牛が食うから大丈夫といって、ゆがいては腹いっぱい食べた。塩もなくそっけないが、ただ腹に入れた。茸の季節になると、大小の色鮮やかなジュータンを敷き詰めたような茸、毒茸かどうかを見分け、ゆでたり、焼いたりして食べた。塩があったらなああと、塩を敵に贈るといふ諺を身をもって体験した。

蛇とか、いなごも、カルシウムとして重宝された。特に虻は貴重な活力源となった。食べ過ぎて鼻血プー

になったこともあった。

日曜は原則として休みだった。雨、風、雪の日も休むことはなかった。しかし大雪とか「大」のつく日は、渋々、休みにしてくれた。その代わり日曜日の作業という羽目になった。働かざる者食うべからずである。

休日には洗濯とか衣類の日干しとかをし、少しでも快適にと心掛けた。奇麗な花が咲いたようにと言いたいが、しみとつぎはぎだらけの、土に汚れたもののはたはたと動いている。生活のにおいのする微笑ましい光景だ。

一段落すると、碁、将棋、麻雀の時間だ。それぞれ相手をきめ、丁々発止とゲームが始まる。真剣な顔、笑みを浮かべる顔、ブスツとした顔、その顔を見るとその日の調子が大体わかる。冗談を交わしながら、心和むひとときだ。作業のことを忘れ、日ごろの疲れをいやした。学生時代に覚えていたのが役に立ち、明日の英気を養った。牌は白樺、つげ等を細工し、奇麗な色づけをし、本物顔負けの立派なものだった。

このほか、釣り針を作ってハエ釣りをしたり、時に

はハツ目鰻を取ることもあり、夜盲症の戦友に食べさせて、症状が好転したこともあった。また年に一―二回懐かしの歌を中心に、股旅物などで楽しんだ演芸会もあった。

そうこうするうちに、何人かの代表が研修という名目で、ハバロフスクに三カ月くらい派遣された。帰ってくると、アクチブ、アジプロとかいって、まるで人間が変わっている。天皇制の批判をし、スターリン大元帥閣下とたたえ、ちよつとでも反動的な言動をしないと、皆の前に立たせ、自己批判をさせ、これでも足りないときは、あることないことを言っけて吊し上げが行われた。人民裁判の小型で、人權は無視されていた。

入ソして一年ちよつとたったころ、言い換えると共產主義のアジプロ活動を勉強し、少しずつ効果が出てきたころ、大きな変革が起こった。旧軍隊の組織制度を残した生活から、将校、特務機関、警察官らをどこでどうやって調べ上げたのか、別のラーゲルに移した。当人は言うに及ばず、お互いの前途が真つ暗になる大きな衝撃を受けた。

下士官、兵だけの集団にし、長を選び、新体制が発足した。ところが、今まで穀類はどこに入っているかわからない雑炊が少し硬くなり、週に一度は、米の飯に、おかずもバラエティーに富んだ駅弁のような献立である。いわく、今までは将校がピンはねをし、自分たちだけ贅沢をしていたからだ。働く者の世の中になると搾取がなくなり、同じ食糧でもこんなに良くなると、共產主義のよさを実例で示す要領のよさ。敵ながらあっぱれである。そのプロセスはどうであれ、質の向上は大歓迎だった。

抑留中の生活と極限状態における意識

飢え、食うか食わぬかの毎日、重病人が食べるような流動食、体力はどんどん落ちていく。追い打ちをかけるように、シラミ、ダニまで養い、血を吸わせている。寒さは零下三〇度―四〇度、防寒具の重さも加わり、身の動きは更に悪くなる。歩くのがやっという状況の中での重労働、口では到底言い表せない苦痛の連続である。

ノルマが厳然と存在する中で、作業能力を高めるた

め、重い木材を自由に動かすような形の鳶を作り、その場に合ったもので体力の消耗を最小限におさえた。また鋸の通りをよくする楔くさびの使用等を考えた。上手に使いこなし、効果は計り知れないものがあつた。

伐採が主体であつたが、時どき貨車積みの応援にも駆り出された。作業をしていると、貨車が通る。高い窓から紛れもない日本人の声で、「お先に帰るぞ」と言う喜びの声が聞こえてくる。ダモイ列車だ。ナホトカから三時間くらいの所だから、否応なしに目の前を通過する。徹夜で重い木を担いで、急な坂を上り下りし、疲労困憊している時である。しばし茫然と見送る姿の哀れさ!! 反面、現実には帰国しているのを目撃し、元気でいさえすれば、いつかは帰れるんだという希望と勇気を与えてくれた。精神力と気力との闘いの毎日である。

寄るとさわると食べ物話である。ぼた餅、羊かん、せんざい……巻ずし、いや、握りだと、人それぞれの好みのものが出てくる。お袋の味をかみしめつつ話は尽きない。酒、ビールなども時々顔を出す。若者の集

団だが、女の話は滅多にない。人が極限に達したとき、まず食べ物第一であることがわかった。単調な生活の中で、食べ物の話の一つの活力源となり、希望の泉だったのではないか。

帰還

悲喜こもごもの想い出が残るチゲロワヤを後にして昭和二十三年十一月十二日ナホトカへ辿り着いた。沿海州で唯一の不凍港の広場には、日本人が溢れていた。朝から晩までグループごとに「スターリン大元帥閣下万歳」「天皇制打倒」……などを大声でアピールし、労働歌を歌い、アジプロ活動に余念がない。反動的な言動をすると、自己批判をさせられ、それでも駄目なら、山奥へ逆戻りさせられると聞き、最後の力を振り絞って、その叫びも命懸けだった。

我々のグループは、一人の落伍者もなく無事乗船、日の丸の旗がはためいている。もう帰り着いたような喜びが湧いてくる。日本海の冬の波は荒く、船底はローリングである。生みの苦しみというか、再生へのステッブだと思ひ、じっと船酔いにも耐えた。

夜が明けると全員甲板に集合、オルグから、帰国したら、かねてから申し合わせているように、代々木の日本共産党本部へ行き、集団入党しようと再確認があった。

十一月二十三日、舞鶴へ入港。温かい出迎えを受け上陸、栈橋を踏みしめた時の気持ちは、言い表わしようのない感激だった。夢が現実になった時だ。検疫を終え、事情聴取、入浴、散髪などをすませ、新品の軍服に着替え、ほんとに「日本」に帰ったんだと実感し、心は故郷へ飛んでいた。父母、祖母、家族の顔が次々に浮かんでくる。

慌ただしい舞鶴の生活も終わり、今まで生死の苦勞を共にした友とも再会を期して別れ、いよいよ日本の汽車に乗り込んだ。車窓の風景、特に都市部の変わりようには、びっくりした。広島、長崎の原爆のひどさを聞いていたが、広島を通して聞きしに勝る惨状には戦慄を覚えた。

列車が下関に滑り込んだとき、父がわざわざ迎えに来ており、目と目でお互いの気持ちを分かり合っている。

た。

やがて父に対し、共産党に入党することを申し合せているがと切り出した。父は「入党はいつでもできる。家に帰り、ゆっくり考えてからでいいではないか。皆首を長くして待っているぞ」と言う。父の言葉に従い松橋駅に降りると、懐かしい友、町内の人が出迎えてくれ、お互いの無事を喜び合った。ソ連で死んだという噂が流れており、幽霊ではないかと冷やかされた。家に着くと、「ご苦労さんでした」と入れかわり立ちかわり来訪、中でも面識もない共産党のオルグが訪ねて来たのには、「面食らうと同時に、やっってるな」と思った。

父から諭されたように、社会情勢は大きく変わっていた。ちょうどレッドパージの嵐が吹き荒れ、職探しもままならなかった。集団入党という申し合わせには反するが、入党を断念した。父の忠告に従ってよかったと思っ

た。一番世話になり、かわいがってもらった祖母は、他界しており、声なき声が涙に変わり、仏壇の前に座っ

ていた。二カ月前に亡くなったと聞き、残念でならなかった。私の帰りを待っていたという。ただ冥福を祈るのみ。

そして叔母に叔父の戦死の状況を報告しなければならぬ。苦しさは、たとえようのないものだったことを鮮明に覚えていた。叔母は、戦死の公報を受け取り、出身地の愛媛松山市へ引っ越して行った。その後「満ソ殉難者慰霊顕彰会」で発行した殉難記に寄稿し、毎年行われている慰霊祭にも役員として参加、命ある限り続けたいと思っている。

一方、県の援護課に状況報告に行ってみると、無事に復員している同年兵の少なさに愕然とした。案じていた友はほとんど帰っていない。私が戦死を確認した同年兵の家には、両親を訪ね、詳しく話し、霊を慰めた。悲しみを新たにし、いたたまれない気持ちだった。結局、中隊は違ったが、同大隊の同年兵八人が時々集まり、戦友を偲び、四方山話をし、当時の苦勞を思い出している。また、抑留は北海道から九州までの混成部隊で、百数十人の住所が確認され、毎年どこかで

「チグロワヤ会」を開催し、無事を喜び、当時の仕事の苦しかったこと、食べ物の欲しかったことなど当時の苦勞話をしている。夫婦同伴も増え、家族ぐるみの付き合いをしている。現地への墓参、遺骨収集が話題に出るが、実現していないのが残念で、気がかりである。

一番楽しいはずの青春時代をシベリアで過ごし、三十年結婚、晩婚だったが伴侶に恵まれ、一男一女も独立し、悠々自適とまではいかないが、普段の生活をしている。

最後に、戦争の悲劇を思うとき、いかなることがあっても二度と戦争はしてはならない。戦争を知らない戦後生まれの世代に、平和の尊さを伝え、戦没者の慰霊と冥福を祈ることが今後の使命と肝に銘じている。

【執筆者の紹介】

畠田氏は、大正十四年生まれ、現在七十一歳です。私とは中学時代、私の一年後輩になります。シベリアから帰還後、当時は仕事も無く、私の家が農家だった

のでしばらく家事を手伝っていただきながら時を過ごしたこともありました。

その後再びお会いしたのは、当時始まったばかりの熊本県果実農業協同組合連合会の事務所でした。事務所は熊本総合卸売市場の片隅にあり狭い所でした。私は組合長に用件があり出向いたのですが、畠田さんはそこで働いていました。仕事があつて良かったなあと、いう気持ちでした。

組合長は中学の私らの先輩であり、当時みかん生産の一大産地作りに意欲を燃していた三角農協の組合長の岩崎守氏で、岩崎氏と畠田氏が熊本県果実連の開拓者であり最高の功労者であると信じます。熊本県果実連はその後発展に発展を遂げ、平成七年度は取扱高は年百八十億円、またその配下には年商売上二百億余のジュース加工場などがあります。

畠田氏は自らが育て上げた熊本県果実連の職員としての最高峰である参事の職を最後に定年退職し、ただちに全抑協熊本県連合会の事務局長として今日に至っております。

温厚誠実な方であります。

思うに、氏が今も忘れることのできないであろうと思うのは、終戦になったことも知らず吉林の山中をさまよううちにソ連兵と遭遇し、一度は死を覚悟したものの、叔父の犠牲によって命拾いをしたことでしょう。叔父様の御冥福を祈りたい。

ソ連抑留中は他のラーゲルよりはいくらか恵まれていたようです。

(熊本県 高瀬 潤吉)

平和の礎に寄せて

熊本県 本田 正行

私は大正十三年九月二十五日、熊本県八代郡吉野村(現、竜北町)本山で、本田又雄の次男として生まれ、昭和十二年吉野尋常小学校を卒業後、店の手伝いから丁稚奉公しているとき、十七年九月徴用令により、佐世保海軍軍需部海上運転手(海軍傭人待遇)として海